

椿三兄弟 特典SS

【長男・優一郎】

わたしは、何をするために来たのか。どうしてここに居続けるのか。

……ああ、もうなにも、かんがえられない。

* *

「はあっ、んっ」

「まだ欲しいのか？ 貪欲な女だ。ああ、そうか。今日は排卵日、だからかな」

ぶちゅんぶちゅんと、膣^{ちつ}の中で愛液が押しつぶされる音が何度も何度も鳴らされて、わたしは何度も何度も狂ったように頭を振る。ずんずんと力強くナカを圧迫されるたびに、押し出されるよう^もに声が漏れてしまう。こらえなければと思えば思うほど、容赦なくピストンは続く。

「はっ、恐ろしい、締め付けだ。これでは、間違って、ナカに、出してしまいそう、だっ」

「やあっ」

「ふつ、嫌がるふりだけは、相変わらずうまい」

伏せた顔を枕に擦り付け、激しいピストンと淫らな声を吸收させる。聞かれないようにしなければ。それだけを何度も頭の中で流し続ける。

「んんっ、ふうっ、はあん！」

「これで満足か？　まだ足りないのか？」

何をされても、どこを責められても、わたしの体は素直に喜んでしまう。何度も重ねてきた行為で、堕落と快楽のどろりとした

甘さを、覚えてしまった。

「も、もうつ、ダメつ、あああ」

膨れ上がりすぎた淫欲に抗えず、絶頂へと駆け昇ろうとしたところで、熱杭ねつきいが引き抜かれてしまった。

「つあ……」

ひくひくとナカが震えてしまう。イキかけていたから？　さつきまであつたものを求めて？

ぽつかりと空白になつた場所は、せつなくて苦しくて、目尻が
生暖かく濡れてしまう。

乱れた髪の毛を梳^すくように、温かで大きな手が頭を優しく撫^なで
ていく。

「泣くほど欲しいのか。淫乱な女だ」

うつ伏せだつた体をゆつくりと仰向けに倒され、覆いかぶさつ
てきた顔を見上げても、視界はぼやけていて、彼の表情から意図
を汲むことはできない。

チュツと音がして、目尻にキスが落とされた。

「（）（）でやめたら、どうする？ やめてほしかったのだろう？ それとも、目的が果たせず、困るのかな？」

髪の毛をすくつていた手のひらは頬を包み、それから首元をなぞって、胸をやんわりと掴んだ。

「選ばせてやろう、たまには」

指先で胸の尖り^{とが}をキュッとつねられて、ビクンッと体が小さく跳ねる。内腿^{うちもも}に力が入ったけれど、それを簡単に割りさくように足が入ってきて、大きく広げるようにして体を密着させた。

「んっ、あん」

ぬちぬちと、音が立ちはじめる。まだなお硬い熱杭が、蜜を溢れさせる入口をなぞるように動いている。

「さあ、どうする？」

ビリビリと鼓膜から体の芯まで貫くような低音ボイスが、甘やかに、毒を染み込ませていく。

耳たぶをジユルリと吸われ、胸の先を強くしごかれ、熱杭が意地悪く蜜穴へ分け入つてくる。

「つ、ふう……ん、お、おねがい、しますっ」

「それだけでよかつたのか？」

「つあ、ゆ、優一郎さん、お願いつ、いじわるしないでっ」

「つふ、まだ正直に言えないのか」

ぐりっと、襖を搔くように熱杭が埋め込まれて、声にならない悲鳴を上げてしまった。

奥まで穿つ杭に、仰け反った体はビリビリと痺れたままかたまる。

「さあ、どうしてほしい？ 私にしてほしいことが、あるだろう？」

ぐつぐつと、最奥に押し込むような動きに、また涙が滲む。
この涙のわけを、考えないよう、気付かないよう、しなければ
いけないのに。

「……お願い、優一郎さん、欲しいの、優一郎さんがっ」

大きな手のひらが両頬を包み込む。誰もがきっと欲しがるその
端正な顔が、甘くほどけていく。

「よく、言えた」

ゆっくりと近付いてきた唇が優しく啄んできて、それから舌が

ぬるりと入り込んできて、ひとつひとつ確かめるように歯列をなぞつて、そして舌を擦り合わせて。

「んんっ」

ゆっくりと動き始めた腰に、全身の毛穴が広がるほどの快感が弾けた。

強火のまま燻くすぶつていた体は、呆氣あつけなく絶頂へと駆け昇る。

腰の動きに連動するようにキスも荒々しくなり、ふいに離れてしまった唇の端からは、お互いの欲にまみれた呼気と喘ぎ声しか漏れない。

「ううっ」

絶頂を迎えた瞬間、抜き取られてしまった。お腹に白濁を散らす優一郎さんは、なにかに苦悩するような表情で。わたしまで錯覚してしまいそうになる。

排卵日じゃなければ。いや、排卵日でも、もう。

ああ、考えちやだめ。これ以上は。

「まだここにいればいい。君の気が済むまで、私が相手をしてあげよう」

わたしの意思なのか、貴方^{あなた}の意思なのか。ふたりでここに留まるのは、誰の望みなのか。